

31【P2】I-297

更年期モデルラット血中ACTH、カテコールアミン及び性腺刺激ホルモン濃度の変動に対する梅果実成分の効果

○伊奈 郊¹, 山田 健², 松本 紘齊², 宮崎 利夫¹(¹東京薬大薬,²(財)梅研究会)

【目的】私達は梅果実成分の薬理学的効用の解明をめざして研究しており、昨年会では梅果実成分のベンジルグルコシド (BG), クロロゲン酸 (CA) 及びその関連化合物の更年期モデルラットに対する、ストレス下に変動する ACTH 及びカテコールアミンへの単回投与での効果について報告した¹⁾。今回はさらに性腺刺激ホルモン変動への実験も加え、連続投与の効果について臨床で用いられている向精神薬と比較、検討する。

【方法】更年期モデルラットは、出産を3～4回経験した雌りタイヤラットを麻酔下に両側卵巣を摘出 (OVX) し、約1ヶ月後実験に用いた。BG, CA の他、カフェー酸、ロズマリン酸などを1日2回、10日間にわたって経口投与した。最終投与日にストレス負荷の目的でエーテル吸入を行った後、採血した。血漿中の ACTH, カテコールアミン (アドレナリン, ノルアドレナリン, ドパミン) 及び性腺刺激ホルモン (LH, FSH) の量はRIA法とHPLC法 (SRL, 東京) で測定した。

【結果・考察】エーテル吸入 (20分間) により ACTH は上昇し、カテコールアミンは減少した。LH および FSH は OVX により上昇した。BG はドパミンが増加傾向で、LH は減少した。CA は ACTH を抑制し、ドパミンを増加させることが観察された。これらの結果はプラゼパム (抗不安薬)、クロミプラミン (抗うつ薬) の効果に類似していた。梅果実成分及びその関連物質は、ACTH 産生量の抑制効果、カテコールアミン代謝回転に与える効果、さらには LH 濃度低下を介して更年期障害改善に有益な作用を及ぼすものと思われる。

【文献】1) 日本薬学会第123年会講演要旨集 2, p. 110 (2003).